

教室がガヤガヤしてる中、山下カケルは指先にある将棋を何十秒も弄っていた。

「おいおい早くしろよ、休み時間が終わっちゃうだろ」

言葉とは裏腹にカケルの向かい側に座る伊藤シヨウは少しも急いでる表情を見せていない。盤上ではすでに詰んでいる状況であり、カケルに逆転の一手はなかった。

「あ……。また僕の負けか……。シヨウは本当に強いなあ」

あつはつはと、まるで自分が大名であるかのようにシヨウは笑っている。

「やっぱりカケルには三日に一度負けるかどうかってところだな。少しつまらないから言っておくが、お前は一度勝つとその勝った方法で次の勝負も挑んでくるからな。正直やりやすいことこの上ない」

そんなシヨウの言葉を目を丸くしてカケルは聞いていた。

「僕はそんなことをしていたのか……」

カケルは自分の馬鹿さ加減に少し飽きれ、ため息をフットついた。そんなカケルの反応を予想していなかったのかシヨウは驚き、その後まるで小さい子どもの様な笑顔を見せた。

二人は所謂幼馴染というやつだ。幼稚園の頃から学校は全て同じ、クラスも同じで、今である高校二年生まで来ていた。二人の極め付けは名前である。カケルとシヨウ二人の名前は両方とも漢字で書くと「翔」となっている。そんな二人を長年知っている人は双子のように彼らを見ていた。実際、二人の仲の良さも兄弟のようであった。

彼らの違いを表すといえば、性格だろう。カケルは少しおとなしめ、シヨウは少しやんちゃだった。

将棋が終わり、窓の外に目を向けたシヨウは笑っていた。それを訝しげな表情でカケルは見ている。

「何かおもしろいことでも窓の外にあるのか？」

それを待っていましたと、言わんばかりの表情でシヨウはカケルの方を向いた。

「また雨だぞカケル！」

その言葉のあと、シヨウは何かツボにでもはまったのか大笑いしていた。なぜ大笑いをしているのか、カケルにはすぐにわかった。

高校に入ったところからだろうか、カケルの感情は天気と一致していた。晴天ならば気分が良い、大雨ならすぐ落ち込んで、曇りなら普通というところである。最近では将棋に二人は嵌っているので将棋の勝ち負けごとに天気がくるくる変わっていた。それがカケルの感情に天気が合わせてるのか、天気にカケルが合わせているのかはわからない。

カケル自身、この天気現象はあまり好きではなかった。意識してやっているわけでは

ないがそうなってしまおう。

「あーあ、感情がバレバレじゃないかこれじゃあ……」

そんな事を話している隣で、頭の良い女の子が二人の耳に届く声で何やらファンタジックな話をしていた

「ねえねえ知ってる？ 最近森の中に出来ただけど、『命の吸血鬼』なんて店があるんだってー」

なにそれーっと聞いている女子は笑っているが、あの女の子がこういう話をするのかと、カケルは少し驚いていた。そんなことを露とも思わずシヨウはポーっとしてしている。

その女の子は話を続けた。

「なんでもその吸血鬼さんは人の病気をなんでも直せるんだって！」

なんだそれと、先ほど聞いていた女の子の言葉と似ている言葉をカケルは発しそうになるが止める。吸血鬼のことを話半分にして聞いていたカケルは、ふと、シヨウの方を向いた。

シヨウは、いきなり真面目な表情をして立ち上がったかとおもうとカケルに向かって叫んだ

「俺たちだけで、遊園地へ行こう！」

シヨウの脈絡のない行動にはいつも困っている反面楽しんでた。

あはははと、シヨウは笑顔を絶やさずに夜道を歩いている。お前の笑い声は何回聞いていても気持ちがいいなど、カケルは言おうと思っただけが止める。ただでさえ二人で遊園地なんてそっちの気があるように思われるのに、そんなことを話しては終わりだと悟ったからである。

カケルの気持ちを汲み取ったかのようにシヨウは答えた。

「俺は彼女と遊園地に来てもうは楽しくなかったと思う」

何を言ってるんだお前、馬鹿じゃないのか、気持ちが悪いなあ、頭の中がどうかしてるんじゃないか、そんな言葉の羅列がカケルの頭の中を覆う。

「僕もそう思っちゃうみたいだ」

そんな言葉が口からすつと出てくる。

「気持ち悪いなー」

「僕が真面目に答えたのが馬鹿だったよ……」

微笑ましいともいうべき二人のやりとりはずっと続いた。

少し街中から離れ、彼らの家に近づこうとしている中、なにやら後ろから大きい音が聞こえてくる。

ブロロロロ、まるで大型動物が鳴いているような音で、大型トラックは近づいてくる。

最初はただ横道にそれて避けようと考えていたカケルだが、焦燥感が彼を襲う。すでにトラックは二人の真後ろについている。カケルは違和感を覚えたが、すぐにその正体がわかる。

スピードが速すぎる。あまりにも速いそのトラックにカケルは恐怖を覚えた。

「おい、ショウ！ さつさと横にずれろ！」

そんなことを気にも留めず、ショウはカケルの後方十mほどのところで音楽を聴いていた。

ショウは爆音で音楽を聴くのが常だった。なんでも考え事をせず音楽を楽しめるんだという。ショウの癖を今だけ煩わしく思う。

すでにトラックはショウの真後ろ。あと数秒で衝突といったところであろう。普通の車ならライトが点いているだろうが、そのトラックは暗闇に佇んでいるだけであった。カケルは必死な表情を見せている。しかし、ショウは笑いをカケルに見せるだけであった。

「ショウ！ ショ……」

ダンッ！ 鈍い音と共にショウが空を舞っている。

空に浮かぶ雲は今にも泣きだしそうであった。

今日の天気は雨、豪雨。ここ一か月ずっとだった。

結果から言うとショウは死んでいなかった。しかし、命に別状が無いわけではない。生きているのに死んでいるよう、所謂、植物状態だった。

相手の運転手は飲酒運転、その結果居眠りをしていたらしい。すぎたことを責めたてるのに意味はない。それをカケルはわかっている。

カケルは学校にいる間も心ここにあらずだった。

「どうして……、どうして……」

そんな言葉を言うのに意味はないとわかっているけども止められない。

病院でショウの状態を聞いてから一か月、いまだにカケルは現実を受け入れられず、ただ思考を停止状態に近づけているだけであった。

病院の人が言うには、ショウの助かる確率は未知数。割合にもできない。

僕にはどうしようもできないことなのか、カケルは嘆き続けるだけ……。ふと、何も考えていない頭の中、今のカケルにとっての希望の言葉になりうる事を思い出す。

「なんでもその吸血鬼さんは人の病気をなんでも直せるんだって！」

藁にもすがる思いでカケルは思い起こした。病氣？ それは怪我でもいいのか？ そもそもどうやって直すんだ？ 新手の詐欺師じゃないのか？ そんなのにすがらただで僕は

良いと思っっているのか？

色々な考えが頭の中から湧いてくる。だが、そんなことは今のカケルには関係がなかった。ショウの助けになるものなら、それがなんだって這いつくばって追っていく。

カケルにとつてのショウはそれくらい存在なのだ。

森の中へカケルは向かう。場所は噂を話していた女の子に聞き把握していた。

「そろそろ見えるはずなんだけど……あ、」

薄気味悪い場所、誰もがそう思うであろう。そんな場所に茶色い小屋があった。回りは草で埋め尽くされ、本当に人が住んでいるかどうかも怪しかった。

「ごめんください」

適当な挨拶を言うと木が腐ったようなドアが開く。

「待っていたよ」

「え？」

予期していなかった言葉に動揺してしまう。そこで何かがカケルを興奮させ、言葉を紡ぐ。

「なんでも病気を治せるって本当？ 怪我でも大丈夫？ 僕は何をすればいいの？」

相手の姿も見えないのに話してしまう。

「とりあえず入れ」

カケルの状態を見て取ったのか、そんな言葉を発した。

三十代だろうか、冴えない顔をしていながらも恐怖を覚えさせるような感じである。

「単刀直入に言う、僕の友達を治してほしいんだ。」

「……」

そいつは答えなかった。カケルを威圧しているようにもとれる。

「なんでも……、僕はなんだってする！」

「命を差し出すこともか？」

「え……」

そいつは気持ちの悪い笑顔を向け、当たり前のように答えた。

「確かに俺は吸血鬼の真似事が出来、病気だって怪我だって治せる」

だがな、と話を続ける。吸血鬼は元来、生命の根源である血を吸い生活をしているとい

う。それを真似、依頼者から血をもらい、人の病気のために分け与えることを仕事として

いた。報酬はもらった血の三分の一。その血を何に使うかは教えてくれないらしい。

そんな意味の分からないことをカケルは何も疑いはしなかった。しかし、心はゆらぐ。

「いのち……。か、金じゃダメなのか！」

「金じゃあ助けることはできない。精一杯の血がないと、お友達は助けられないぜ？」

また笑っていた。気が狂っている、というよりカケルの反応を楽しんでいるようだ

「大丈夫だ、お前が消えた後はお前の存在していたことはなくなる。どうだ？ 都合がよ

くていいだろう？ お前は気兼ねなく命をさしだすことができる！」

本当に人間なのだろうか？ そんな疑問さえ浮かばせる男だとカケルは震えながら思った。そんなカケルの姿を見て何かを諦めたかのように、男は笑顔を消した。

「大丈夫だ。お前みたいな依頼者はいっぱいいる。友達を助けてくれ！ 家族を助けてくれ！ 我が子を助けてくれ！ 今まで何百人といたが、誰一人として自分の命を差し出すものはいなかった。お前だって例外じゃない」

違う……僕は違う……、カケルは呟く。シヨウのためなら……と、

「命くらいくれてやるさ」

涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、笑顔で答えた。

とある病室。シヨウは意識をとりもどしていた。大事な人に助けられていることも、本当は死んでいることも知らずに。

ふと、窓の外をみてシヨウはにやける。

「快晴なのに、なんか負けた気がするよカケル、……カケルって誰だよ」

あはははと、シヨウは一人で笑う。理由のわからない涙とともに。

おわり